みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

New Perspectives for the Turk Study : Field study on the Kirghiz by Chokan Valikhanov

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澤田, 稔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003528

ワリハーノフのキルギズ研究

澤　田　　稔*

はじめに
Ⅰ．ワリハーノフの生涯
1．家庭環境と修学時代
2．中央アジアへの調査旅行
3．ペテルブルクでの活動とステップにおける晩年
Ⅱ．キルギズ研究の概要
1．イッシク・クル湖北東岸への実地踏査
2．実地調査の記録と研究成果
1）民族名称と領域
2）氏族部族的集団
3）口頭伝承
4）農業
おわりに

はじめに

カザフ人の先駆的学者チョカン・チンギソヴィッチ・ワリハーノフ Чокан Чингисович Валиханов（1835–1865年）は，その30年という短い生涯にもかかわらず，中央アジアの歴史・地理・民族誌の研究において多大の功績を残した。カザフスタン共和国のアルマトィ（またはアルマトゥ，旧称アルマ・アタ）にある歴史・考古学・民族学研究所には，彼の名が冠され，その業績が記念された。ワリハーノフはカザフ遊牧民の王侯の家系に属し，その遊牧文化に通暁していたのみならず，他の中央アジア諸民族の文化にも深い関心を示した。それはロシア帝国の中央アジアへの軍事的進出と無縁ではなかったけれども，彼の残した記録は，トルコ系カザフ人の出身でロシア語に堪能であった知識人の研究成果として我々に貴重な情報を提供している。

ワリハーノフは1855年から1859年まで，カザフスタン東部から新疆西部にかけての地域を旅行し，調査活動をおこなった。ほぼ同時代の著名な東洋学者・民族学者のラドロフ B. B. Радлов（1837–1918年）が，西シベリアの町バルナウル Барнаул を拠点に西シベリア南部からカザフスタン東部・中央アジアにかけて旅行をしたのは，1860年から1870年までである（Радлов 1989: 9–13; Radloff 1968: I–10–14）。両者の調査

* 帝塚山学院短期大学，国立民族学博物館共同研究員

Key words : Kirghiz, Valikhanov, Kazakh
キーワード：キルギズ（キルギス），ワリハーノフ，カザフ

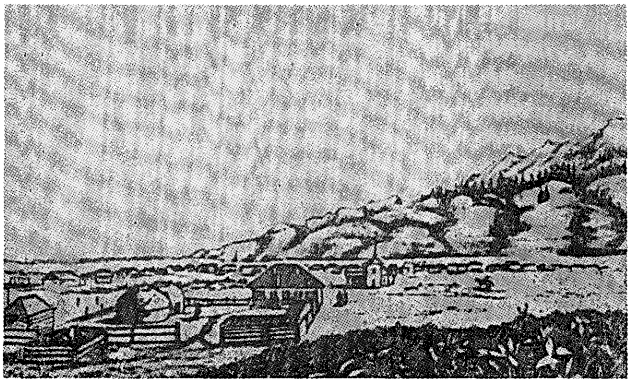

図1　1857年のヴェルヌイ堡塁（セミョーノフ・チャンシャンスキーの絵から）（ИКазССР III: 189）

成果は，同時代資料として比較考察されるべき価値を有している。ワリハーノフが生きた時代は，まさにロシア帝国の中央アジア征服が始まる時期であった。例えば，アルマトィにヴェルヌイ堡塁［またはヴェルノエ堡塁，図1参照］がロシアによって築かれたのは，1854年のことであり（ИКазССР III: 189），ワリハーノフが病没したのは，1865年のタシュケント陥落の一ヶ月前のことであった（小松 1996: 35）。

本稿では，ワリハーノフの広範な業績の中から，天山山脈西部のイッシク・クル湖（イッシク湖）周辺におけるキルギズ（キルギス，クルグズ）遊牧民の実地調査資料を検討する（大まかな地名については，図6の地図を参照されたい）。彼がロシア語で書いた論文，調査旅行の記録・報告，そしてスケッチ・絵画などの業績は『著作集』としてまとめられ，伝記や解説・注釈なども加えられている。本稿では主として，1984–85年にアルマ・アタで出版されているもの（Валиханов 1984; 1985a; 1985b; 1985c; 1985d）を使用する[1]。なお，資料を引用する際に固有名詞や専門用語などに付した丸括弧（　）内の説明や言語などは引用資料のものであり，角括弧［　］内の説明や語句は筆者澤田による補足である。

I．ワリハーノフの生涯

本論のキルギズ遊牧民についての実地調査を検討する前に，ワリハーノフの生まれ育った環境や研究活動のあらましを見ておきたい[2]。

1. 家庭環境と修学時代

まず注目されるのは，かれの高貴な出自である。彼は1835年11月，カザフスタン中北部のクシュムルン Кушмурун 要塞で生まれた。彼の正式な名前はムハンマド・ハナフィーヤ Muḥammad Ḥanafīya であり，チョカンは母親がつけたあだ名である（Валиханов 1984: 17)。父チンギズ Chingghiz はオムスクのシベリア方面軍学校で教育を受けた文化人であり，祖父ワーリー Wâlî は中ジュズ最後のハンであり，曾祖父アブライ Ablay はハン即位（1771年）以前の1740年にロシア臣籍を誓った（川上 1980: 27, 30)，中ジュズのハンであった（Валиханов 1984: 9, 11; 1985a: 369)。バラークの子で，15世紀の中ごろに初代のカザフ・ハンとなった（佐口 1979a: 73; 1979b: 16）ジャーニーベクからの，この一族の系図が『著作集』巻4に掲げられている（Валиханов 1985c: 174, 177)。

彼はクシュムルンにおいてカザフの私的学校でアラブ文字綴りの基礎を習得し，鉛筆画の描き方を習った。その学校では通常，キプチャク語やチャガタイ語で中世の文献を読むことや，アラブ語，ペルシア語会話の練習や，東洋の詩の朗読がおこなわれた。伝統によると，スルターン［ハン家の王侯のこと］の子供たちはいくつかの東洋語を学ばねばならなかった。あるいは，《жеты журттын тілін білу》[3] と言われたように，七つの民族（народ）の言葉を知らねばならなかった（Валиханов 1984: 19)。

1847年秋，父はより良い教育を受けられるようにと，12歳のワリハーノフをシベリア陸軍士官学校に入れるためにオムスクへ連れて行った。この学校はシベリア方面コサック軍の学校を基にして1845年に設立され，当時最高の学校のひとつと見なされていた。そのカリキュラムには，軍事教科以外に世界地理，ロシア地理，世界史，ロシア史，ロシア・西欧文学，基礎哲学，植物学，動物学，物理学，数学，測地学，建築学・建築術，自然史概論が含まれていた。また製図，図画，書道，ロシア語，フランス語，ドイツ語も教授された。それ以外に東洋諸語の特別クラスがあり，テュルク語，モンゴル語，アラブ語，ペルシア語が教授された。教育期間は8年であった（Валиханов 1984: 21–23)。

ワリハーノフはこの学校で優れた教授たちに学び，またオムスクの知識人とも交際した。特にロシア文学を教えていたコスティレツキー Н. Ф. Костылецкий は彼に大きな影響を与えた。二人は共同してカザフの英雄叙事詩の研究に従事した。そしてコスティレツキーの推薦により，ワリハーノフと東洋学者ベレズィン И. Н. Березин との文通が始まった。ワリハーノフは「トクタミシュのヤルリク」の用語の解明におい

てベレズィンを助けた。また彼の親密な同窓生に，モンゴル・チベットなどの探検家・民族学者として有名になるボターニンГ. Н. Потанинがいた（Валиханов 1984: 23, 28–29）。なお，ワリハーノフはドイツ語とフランス語をうまく話したという（Алдан-Семенов 1965: 130–131; アルダン・セミョノフ 1972: 170）。

2. 中央アジアへの調査旅行

ワリハーノフは1853年に18歳で陸軍士官学校を卒業し，シベリア・コサック第6騎兵連隊の将校に任じられたが，実際上は西シベリア総督のもとに置かれ，一年後ガスフォルト Г. Х. Гасфорт 将軍の副官に任じられた。そして1855年，ガスフォルト将軍の調査行に参加して中央カザフスタン，セミレチエ，タルバガタイを旅行した。ワリハーノフはこの旅行において，カザフの統計，慣習法，古宗教についての資料を集めている（Валиханов 1984: 32–33, 35）。

1856年にはホメントフスキー М. М. Хоментовский 大佐指揮下の軍事的・学術的遠征に参加した。その遠征の目的はキルギズ民族の視察とイッシク・クル湖沿岸地域の地形測量であった。ワリハーノフは1856年5月の後半に旅行を始め，アラ・クルから中央天山，イッシク・クル湖に至った。彼は2ケ月キルギズ族の間に滞在して，その伝承や叙事詩などを記録し，7月中頃，ヴェルヌイ Верный 要塞に帰還した（Валиханов 1984: 37–40）。

この帰還は，ロシア政府が中国との交渉の任務にワリハーノフを就かせるために，遠征隊を呼び戻したためである。1856年8月始め，彼はクルジャに向かった。そして中国との外交交渉をおこない，貿易と友好関係の回復に成功した。彼は約3ケ月クルジャに滞在し，晩秋の訪れとともにオムスクに帰った（Валиханов 1984: 40–41）。

1857年，ワリハーノフは再度アラタウ Алатау のキルギズのところへ旅行した。この旅行について西シベリア総督ガスフォルトが外務省に提出した報告によれば，彼は中国西部における情報の収集のために，キルギズの遊牧地に派遣されたのである（Валиханов 1984: 41）。田中克彦（1961a: 39）によると，ブグゥ族の首長にロシア政府からの贈り物をとどけるという公式の用をもっていた。

彼はキルギズ民族の生活や習慣についての資料を集め，その歴史，民族誌，民衆詩を研究した。特にキルギズの英雄叙事詩『マナス』を記録したことは重要な意義を有している（Валиханов 1984: 41–42）。

ワリハーノフの地理的・歴史的研究業績は地理学者のセミョーノフ・チャンシャンスキー П. П. Семенов-Тян-Шанский によってペテルブルクの学界に知られるように

なり，1857年2月27日，ワリハーノフはロシア地理学協会の正会員に選ばれた（Валиханов 1984: 44）。

その優れた功績がロシアの学界において認知されたワリハーノフはさらに，勇敢な旅行家の名声を生みだしたカシュガルへの調査旅行をおこなう。これは主にセミョーノフ・チャンシャンスキーと外務省アジア局長のコワレフスキー Е. П. Ковалевский の首唱によるものであった（Валиханов 1984: 45）[4]。

1858年6月28日，ワリハーノフはカラムラ Карамула に到着し，セミパラティンスクからやって来た貿易キャラヴァンに加わった。そのキャラヴァンは43人［（Валиханов 1985b: 38）では42人］，101頭のラクダ，66頭の乗用馬・駄馬，6つの天幕からなっていた。彼は頭を剃り，カザフの民族服に着替え，カパル Капал［コパル］からの商人，隊商長ムーサバイ караван-баши Мусабай の親戚アリムバイ Алимбай と名乗った。キャラバンはイリ河谷からイッシク・クルの河谷へ進み，アクサイ Аксай の道によりカシュガルへ向かった。その間，キルギズ族のブグゥ Бугу 氏族が集まっていたテケス Текес，カルカラ Каркара，コクジャル Кокжар の河谷において8月中を過ごしている。キャラヴァンは9月26日テレクティ・ダヴァン Теректы-Даван 峠［テレクティ峠］に到達し，翌日，中国の国境を越え，要塞でコーカンドのアクサカル［領事兼徴税官］に迎えられ，保護下に置かれた（Валиханов 1984: 46–48）。

ワリハーノフは1858年10月1日から1859年3月中頃までカシュガルにおいて約半年間すごした。彼がカシュガルに居た時，最初ナスレッディーン Насреддин という者が，後にヌールマハメト・ダートハー Нурмагамет-датха という者がコーカンドのアクサカルであった。両人はワリハーノフと旅仲間を歓待し，保護下に置いた。ワリハーノフは種々の情報を集めたり，写本や貨幣や鉱石や植物などを収集したりしていたが，カシュガルが不穏になったため，1859年3月11日に帰路についた（Валиханов 1984: 48–49）。

帰路ではトゥルガルト Тургарт 峠，ナリン Нарын 河などを経て，1859年4月12日ヴェルヌイ要塞に到着し，セミパラティンスクを経てオムスクに帰還した（Валиханов 1984: 49–50）[5]。

3. ペテルブルクでの活動とステップにおける晩年

カシュガルでの調査によって非凡な研究者としての評価を得たワリハーノフは，中央アジアの併合を進めていたロシア帝国にとって有用な人物になっていた。彼は1859

年の末ペテルブルクに赴き，1860年6月15日，陸軍省から外務省アジア局への彼の転任の指令がアレクサンドル2世によって裁可された（Валиханов 1984: 51–52）。

ワリハーノフのペテルブルクにおける活動は極めて活発であり，多方面に渡っていた。すなわち，彼は参謀本部軍事学術委員会の委託をうけ中央アジアと東トルキスタンの地図を作成した。また地理学協会においては，ドイツの地理学者カール・リッター K. Риттер の労作の出版準備に参加し，カザフスタンと中央アジアの地理・民族誌の資料を編纂したり，会員に講義したりした。また地理学協会の出版物として論文を発表する準備もした。彼はその副会長のセミョーノフ・チャンシャンスキーと絶えず緊密な関係にあったのである。そしてアジア局ではコワレフスキーらと交友し，テュルク諸語を教授している（Валиханов 1984: 57–59）。

彼はさらに向学心を持ち，大学の歴史・文献学科で聴講し，諸外国語の勉強を続けた。また当地の学者や作家たちとの交友も盛んであった。特に，1854年のオムスクにおける出会いで始まった文豪ドストエフスキー Ф. М. Достоевский との親交は，この地でも続いた（Валиханов 1984: 58–59）。

しかし1861年の春，ワリハーノフは重い病気（肺結核）のためにペテルブルクを去らねばならず，医師の助言により静養のため故郷のステップへ帰った。彼はペテルブルクにおいて1年半過ごしただけであった（Валиханов 1984: 60）。

彼のアウル аул［宿営キャンプ］に出入りした民衆詩人や楽士らが彼の心を喜ばせたが，ステップにおける後進性や植民地役人とカザフ封建領主の圧政・専制をも痛感した。そして民衆の利益と権利を擁護するために，1862年，選挙による年長スルターンの職に立候補した。しかし，やがて親戚との不和のためにオムスクに行き，そこで地方の役所の法律委員会の仕事に参加し，カザフの司法制度改革の問題に取り組んだ（Валиханов 1984: 61–63）。

1864年春，ワリハーノフはチェルニャエフ М. Г. Черняев 将軍の軍事遠征に招かれ，アウリエ・アタ Аулие-Ата 要塞占領の際の軍事行動に交渉役として参加する。しかし，同年7月チェルニャエフ将軍の植民地主義的行動に不満な将校たちとともにヴェルヌイ市に帰った（Валиханов 1984: 63–64）。彼は進軍中のロシア軍兵士がカザフ人に加えた残虐行為に抗議して軍律を破り，軍職を解かれたという（小松 1996: 35）。

そしてヴェルヌイからカザフのアルバン албан 氏族の年長スルターン，テゼク Тезек[6]［テゼク・アブライハノフ　Тезек Аблайханов］のアウルに行き，その姉妹アイサルィ Айсары と結婚した（Валиханов 1984: 65）。

しかし彼の健康は回復せず，1865年4月10日，アルトィン・エメル Алтын-Эмел 山脈の麓から遠くないコチェン・トガン Кочен-Тоган のテゼクのアウルにおいて逝去した。死後そこに焼き煉瓦で円天井の霊廟が建てられた（Валиханов 1984: 65, 90 footnote 1)。

Ⅱ．キルギズ研究の概要

1．イッシク・クル湖北東岸への実地踏査

ワリハーノフがキルギズの遊牧地を訪れたのは，前章で述べたように1856，57年のキルギズ調査と，1858年から1859年にかけてのカシュガルへの旅行の往復路においてであった。

そのような調査行のなかで，キルギズについて最も親しく観察したのは，1856年の遠征であったと思われる。その旅程は「1856年イッシク・クルへの旅行日誌」（Валиханов 1984: 306–357）に詳しく記されている。

この1856年の調査は，ロシア帝国とイッシク・クル湖周辺のキルギズ族との接触の結果であった。すなわち，イッシク・クル湖付近で遊牧するブグゥ бугу 氏族出の，キルギズの族長（マナプ манап）ブランバイ Буранбай[7] は属下の1万天幕の氏族とともに，1855年ロシア国籍に入った。彼らの求めに応じて，また彼らに宣誓させるため，そしてイッシク・クル湖の測量のために，翌年の春，ホメントフスキー大佐指揮下のコサック部隊が遠征することになったのである。2ヶ月にわたる遠征において，アクスゥ Аксу とザウカ Заука までのイッシク・クル湖周辺が測量された。ワリハーノフはこの遠征に参加し，2ヶ月キルギズ族の間に居て，伝承や言語を研究したり，種々の情報を集める時間があった。彼はブランバイのアウルを訪れて伝承を集めるなどの活動をしている（Валиханов 1985a: 10–11; 1985b: 344–345)。

彼の行程は，「1856年イッシク・クルへの旅行日誌」によると，4月18日にセミパラティンスクを出発し，アヤグズ Аягуз を経て，レプサ Лепса 河，アクスゥ Аску 河を渡り，ステップを南下した。そして5月15日に，クンゲイ・アラタウ山脈から源を発し，イリ河に注ぐチリク Чилик 河で宿営した。チリクの上流はカザフ族の通常の冬営地となり，昔カラブラク Карабулак からウチュバイソルン Учбайсорн まで［キルギズの］サルバグシュ族 сарыбагыши が占めていたが，今は［カザフの］アドバン家の氏族キズルボルク адбановский род кизлборк がそこで冬営しているという

(Валиханов 1984: 312)。

ワリハーノフはチリク河からチャリン Чарын 河へ向かう途中，トライグル Тора-йгыр 山の北側斜面で夜を過ごしている。彼はこの地域について次のような記事を残している。すなわち，トゥルィ・アイグル Туры айгыр は栗毛の種馬を意味する[8]。カザフがカルムィク・ジュンガルをこれらの地から放逐した時，この山で栗毛の種馬を見つけたと，カザフの伝承において語られている。トライグルはアドバン族 адбани の最上の冬営地である，と (Валиханов 1984: 315)。

5月21日から，チャリン河の上流カルカラ Каркара 河で宿営した。カルカラ地域は夏の遊牧地であり，アドバン族とディコカメンヌイ［すなわち，キルギズ］の氏族ブグゥ бугу がそこで遊牧している。ここには馬虻も蚊もいないという。ワリハーノフ一行はブグゥ族が遊牧しているこの地域に行くことが必要であったのである (Валиханов 1984: 321, 323)。それは先に述べたように，ブグゥ族の族長ブランバイと接触するためであった。

5月25日から，サンタシュ Санташ 峠付近のテュプ Тюп 河で宿営した。テュプ河はイッシク・クル湖東端に流入する河である。サンタシュ峠はクンゲイ・アラタウ山脈東端の峠であり，その山脈を越える多くの峠があるが，サンタシュが最も重要で，あらゆる種類の通行に適しているという (Валиханов 1984: 243, 406)。

ワリハーノフはサンタシュ (「計算の石」) の名の由来について，次のように記している。この峠は山のようにクルガン［塚］に積まれた石から，その名を得た。クルガンの高さは3サージェン［1サージェンは約 2.134 m］で，周囲は35サージェンある。伝説は次のように伝えている。エミール・テミル・クルゲン［ティムール朝の創始者アミール・ティムール・キュレゲン］がカアン・チン Каан-Чин (中国皇帝の称号) の娘を自分のハーレムに入れるために中国に向かった時，兵士一人一人に，ある場所で石を一つずつ置いていくよう命じた。彼は帰還後，すべての兵士に石を取って別の所に置くよう指図した。彼は取り上げられなかった石の数で死傷者の数を判断した，と (Валиханов 1984: 325–326)[9]。ワリハーノフも指摘しているように，中国遠征に向かったアミール・ティムールは途中のオトラルで死んだのであるから，歴史的事実はこの伝説に矛盾しているが，サンタシュ峠の軍事的重要性を示唆する伝説として注目される。

さらにワリハーノフは追記して，サンタシュのクルガンに対するキルギズの見方を紹介している。すなわち，ディコカメンヌエ・キルギズィ［すなわち，キルギズ］はサンタシュの塚を，カルムィク・ジュンガルに対する勝利の記念物として，カザフの

ハン，イシム хан Ишим のものとしている。これはより確からしい。イシムは実際にこれらの場所にいて，ホンタイジに打ち勝ったのだから，と（Валиханов 1984: 326）[10]。

5月26日サンタシュ付近のテュブ河の宿営において，ワリハーノフはキルギズの歌い手（ウルチュ ырчы）から英雄叙事詩『マナス』を聞いた（Валиханов 1984: 327）。「キョキョトイ・ハンの死とその追悼会」（Валиханов 1985a: 90–100）という英雄叙事詩『マナス』の一部分の内容紹介はこの時の記録に基づくものであろう（Hatto 1977: v, 93–94）[11]。

6月1日，ワリハーノフは上述の族長ブランバイのアウルに向かった。テュブ河南方のジルガラン Джиргалан に彼のアウルがあると言われていたが，すでに移動していて，そこにはキリチュ Килич（サーベル）という名の彼の息子がいた。そこで塩入りのチャイやクミズ кумыз［馬乳酒］で歓待され，さらに先に進んだ。途中のアウルで葬礼の哀歌を聞いている。キルギズにおいては，寡婦は一年間，声を挙げて夫の死を悲しまねばならず，イスラム教徒が傍らを通る時，歌わねばならなかったのである。ユルタ［天幕］に懸かっていた黒い旗は死者の年齢の程度を示していた。旗が赤であれば，死者は若者で，黒であれば中年で，白であれば老人であるという。ワリハーノフはさらに老婦達と談笑し，クミズの杯を傾けた（Валиханов 1984: 331–334）。

一行の到着を待っていた次のアウルでも歓待された。キルギズの住民たちは彼を驚かせる願いを申し出た。すなわち，「我々のもとにジン джин（悪魔）たちにとりつかれた不幸なアヤチュ аяч（婦女）がいる。白い骨の人はそいつらを追い出すことができると，我々は聞いた」と彼らは言い，ワリハーノフに鞭でその婦女を叩いてジンを追い出すよう求めたのである。既に述べたようにワリハーノフはカザフのハンの家系に属していた。つまり，「白い骨の人」なのであった。結局，この不幸な若い婦女は，夫の暴力のために気が狂ったようになっていただけであり，夫などへの説得で事は解決したようである。このようにうろうろしながら，ようやく夕方に，ブランバイのもとに到った（Валиханов 1984: 333, 334–335）。

6月2日，ワリハーノフはブランバイのアウルにおいて天幕の中でクミズや煙草をすすめられ歓待された。諸氏族やマナプ［族長］たちについての質問もした。彼はブランバイのもとから去り，さらに他のアウルを訪ねたが，キルギズの女性と親しく談話したり，その服装や髪型に注意を向けている（Валиханов 1984: 335–340）。

6月3日，キルギズのジェルデン джелден 氏族のアウルに泊まり，4日の晩にクドゥルゲ Кудурге［クトゥルガだろう］河のところにいた部隊のもとに到着した

(Валиханов 1984: 341)。

いよいよイッシク・クル湖を去る日がやってきた。ワリハーノフはクンゲイ・アラタウ山脈を越えるのに，チャトィ Чаты という峠道をたどることにした。その峠は危険で困難な道であるけれども，一年のすべての期間，サンタシュ峠が雪の多い冬に通れなくなる時でさえ，開かれているという（Валиханов 1984: 343–344)。断崖沿いのチャトィの道を苦労しながら通って，チリク河の上流域を経て，6月13日に，良い夏営地であるジャラナチュ Джаланач［ジャラナシュか？］という高台に出た（Валиханов 1984: 347)。そしてトゥルゲン Турген，イッシク Иссык，タルガル Талгар を経て，6月15日夜，ヴェルヌイ要塞に到着したのである（Валиханов 1984: 349)。

2. 実地調査の記録と研究成果

この1856年の実地調査を中心とする記録や研究成果は「キルギズについての覚書」（Валиханов 1985a: 7–82）とその付録「キルギズ諸族の氏族下位区分」（Валиханов 1985a: 82–89）にまとめられている。その「覚書」は，全てのキルギズやキルギズの住んでいる領域すべてに焦点が当てられているのではなく，イッシク・クル湖周辺のキルギズが叙述の中心になっている。但し，その内容は，天山とイッシク・クル湖沿岸地域の自然地理，キルギズの経済（牧畜，農業，交易など)，衣食住，社会階層，種族構成，歴史，言語，文学，宗教，風俗習慣など多岐にわたっている。

その内容すべてをここで取り上げることはできないので，筆者の関心から特に重要と思われるものを整理して紹介したい。また，網羅的ではないが，対照資料としてラドロフの記事に言及しておく。

1）民族名称と領域

キルギズの民族名称について注意せねばならないことは，周りの諸民族から様々な呼び名がキルギズに与えられたということであろう。よく知られている例を挙げると，帝制時代のロシア人はカザフをキルギズと呼び，それと区別するために本来のキルギズをカラ・キルギズ［「黒キルギズ」の意］と呼んでいた[12]。ワリハーノフ自身はたいていの場合，ディコカメンヌエ・キルギズィ дикокаменные киргизы[13] という表現で本来のキルギズを示している。

キルギズの呼び名についてワリハーノフは次のように説明している。すなわち，ディコカメンヌエ・キルギズィ自身は単にキルギズ киргиз と自称しており，全中央ア

ジアのムスリムにこの名で知られている。ただキルギズ・カイサク［すなわちカザフ］は時折かれらにアク・カルパクトィ ак-калпакты（白い帽子の）やカラ кара（黒い）の形容辞をつけ加えている。ディコカメンヌエ，ザカメンヌエ закаменные という形容辞は，キルギズ・カイサクと区別するために，ロシア人によって付けられたものであり，彼らの土地の山岳的特徴を表している。中国人はブルート бурут[14] という名称を用い，西ブルートと東ブルートに分けている，と（Валиханов 1985a: 7）。なお，ラドロフは中央アジアのキルギズをカラ・キルギズ Kara-Kirgisen/кара-киргизы と呼んでいるが，「彼ら自身はクルグス Kyrgus/クルグズ кыргыз と自称する」と述べ，ワリハーノフの記述と矛盾しない（Radloff 1968: I–230; Радлов 1989: 106, 604 note 148）。

このように自称のキルギズ（クルグズ）という民族名以外に，様々な呼称が用いられてきたが，本稿では，これまでの行論と同じく，これから先も，通常「キルギズ」という呼称を用いていく。

なお，後述するように，ワリハーノフはキルギズ［クルグズ］という名称がクルク・クズ кырк кыз［「四十人の乙女」の意］に由来するという伝承を紹介している。

キルギズが生活している領域をおおまかに示そう。ワリハーノフの記述によると，キルギズの遊牧地はイッシク・クルからヒッサールやバダフシャンまで，スザク Суз-ак［アンディジャン東方のスザクか，トゥルケスタン北方のスザクかは不明］からアクスゥとウチュ・トゥルファンまで分散しているという。また，大多数の氏族（род）の遊牧地の中心はアンディジャン付近と，北はチューまでの，西はチルチク Чирчик［タシュケントの東北方に位置する］までの，東はアクスゥ，ウチュ［すなわちウチュ・トゥルファン］，カシュガルまでの，南はバダフシャンまでの，山地帯とにあるとも言っている（Валиханов 1985a: 7–8）。

彼自身その説明のなかで告白しているように，キルギズ自身の有する情報の少なさや同族間の地理的隔絶ゆえに，キルギズの遊牧地を詳細に確定することは困難であった。東は天山山脈中部・西部，イッシク・クル湖周辺から，西北はフェルガーナ盆地，チュー河から，南はパミール高原，アム河上流までという範囲を想定しておけばよいであろう。

2）氏族部族的集団

ワリハーノフはキルギズ族を構成する集団について詳しい情報を伝えている。その情報は，イッシク・クル湖周辺で遊牧するブグゥやサルバグシュ，チュー河とナリン

河の間で遊牧するソルトゥやサヤクという集団について特に詳しいが，まずキルギズ族の全体的な集団構成を見ていこう。

キルギズは右翼（オン・コル он кол「右［手］」）と左翼（ソル・コル сол кол「左［手］」）とに分かれており，主要な氏族（род）はタムガ тамга と言われる特別なしるしと，軍の呼び声ウラーン уран[15] をもっているという（Валиханов 1985a: 40）。ラドロフも，キルギズは Ong（右）と Sol（左）の二つの部分に分かれるとしているが，さらに，部族区分 Sol の関の声（すなわち，ウラーン Urân）はクネク Kunek であり，部族区分 Ong のはジャン・クラス Dshan-Kuras であるそうだ，と述べている（Radloff 1968: I-230, 534; Радлов 1989: 106, 354）。

ワリハーノフは右翼については，それに属する主要な集団ごとの居住地や人数などのデータを挙げているが，左翼については，短く記述しているだけである。それはボロルの渓谷や高峻なパミール，アム・ダリアやシル・ダリアの上流域で遊牧する左翼の諸氏族について，十分な情報が集められなかったからである（Валиханов 1985a: 40）。

なお，バルトリド（Бартольд 1963: 532–533）は，キルギズが右翼と左翼に分かれているというワリハーノフの情報を引用し，左翼がキルギズの領域の最西端すなわちタラスにおける場所を占めていることから，「キルギズは東西南北を決める時に，古代のテュルクのように東ではなく，またモンゴルのように南ではなく，北に向かって立っていた」と考えている。バルトリドのこの結論は魅力的ではあるけれども，左翼・右翼に属する集団の分布を時間的経緯を含めて十分に検討した結果とは思われず，やや性急の感は免れない。ワリハーノフの言うように，ボロルの渓谷や高峻なパミール，アム・ダリアやシル・ダリアの上流域で左翼の諸氏族が遊牧しているのであれば，西に向かって左右に配置されていたとも考えることができる。あるいはまた，左右翼への諸集団の帰属がある時期に決定され，時代を経るにつれて集団の実際の遊牧地の変遷を伴いながらも（つまり，遊牧地域の配置が変化しても），その帰属自体は変化せずに固定化された，という可能性はないのであろうか。

次に，右翼に属する集団の規模や居住地や特徴を整理しておこう。

ソルトゥ солту 氏族（род）は約2万ユルタ［天幕］であり，チュー河に注ぐ諸河川沿いやタラス河の諸支流沿いに夏と冬の遊牧地をもっている。タムガはアイ ай(月)であり［図2］，欠けた月の形をしており，ウラーンはカラタル каратал である（Валиханов 1985a: 42）。

ブグゥ бугу 氏族は約1万天幕であり，テルスケイ Терскей と呼ばれる，イッシク

図2

図3

図4

図5

図2　ソルトゥのタムガ（Валиханов 1985a: 42）
図3　ブグゥのタムガ（Валиханов 1985a: 43）
図4　サルバグシュのタムガ（Валиханов 1985a: 44）
図5　ブグゥとサルバグシュのタムガ（Radloff 1968: I-534）

・クル湖の南の谷間に冬の遊牧地をもっている。ザウケ Зауке 河は彼らの農業の中心地であり，マナプ［族長］のブランバイ Буранбай の冬の恒常的な部落（стойбище）である。この河にクルガン（城壁のある小さな町）が彼によって建てられ，ブドウが栽培された。タムガは［図3］の形をしており，ジャガルバイ джагалбай と呼ばれる。ウラーンはジャンゴラズ джангораз である。ブグゥ бугу は鹿を意味する。ブグゥは夏に中国の哨所の向こう，テケス Текес 河，ムザルド・ダヴァン Музард-Даван の山地や高い谷間スィルト Сырт あるいはサルヤズ Сарыяз に移動する（Валиханов 1985a: 42–43, 84–85）。

サルバグシュ сарыбагыш 氏族は1万ユルタ余りであり，冬の遊牧地はクルメトィ Курметы 河からクンゲイ Кунгей［イッシク・クル湖北辺］の北谷間沿いに下流へ，［イッシク・クル］湖の西端まで，クトィマルドィ Кутымалды までである。夏にカスケレン Каскелен, クルトィ Курты 両河の上流域あるいはチュー河へ去る。タムガとウラーンはブグゥと同様である［が，タムガは］区別するために小さくなっている［図4］（Валиханов 1985a: 43–44）。ワリハーノフの図示したサルバグシュのタムガ［図4］とブグゥのタムガ［図3］は若干形が異なるが，ラドロフは両者のタムガ（所有のしるし）として［図5］を挙げており，ジャガルバイ Dshagalbei と呼ばれると述べている（Radloff 1968: I-534; Радлов 1989: 354）。なおバルトリドは，このサルバグシュ（「黄色い大鹿」の意）と後記のチョンバグシュ（「大きな大鹿」の意）について，天山には大鹿は棲んでいないので，この両者の名はサヤン山脈の向こうにおけるキルギズの在住の痕跡であると考えねばならない，という（Бартольд 1963: 533–534）。

サヤク саяк 氏族は1万3千天幕であり，イッシク・クルの南に，ソンコル Сонколь 湖（タラスの上流域［ソンコル湖はタラス河の上流ではなく，ナリン河支流の上流にある］）に，ナリン，コシュコラタ Кошкората, ジュサゴル Джусагор 諸河川沿いに遊牧している。サヤクの各氏族はタムガをもっており，古い呼び声ウラーンは，

タイラク Тайлак, サドィル Садыр のごとき，前世紀に生きていた勇士たちの名にとって替えられた（Валиханов 1985a: 44）。

チェリクチ черикчи 氏族は約千ユルタ，チョンバグシュ чонбагыш 氏族はせいぜい5百ユルタと推量される。両氏族は天山山脈の南斜面，アクスゥとウシュ・トゥルファン付近に恒常的な遊牧地をもっている。そこは夏の涼しさと豊富な飼料によりサルヤズ Сарыяз 谷の名で最良の夏の遊牧地と見なされている。両氏族は「黒い」オルダの最も貧しく少数の一族と見なされている。チェリクチの主要な部落と耕地はアトバシ Атбаши, アルパ Арпа の自然的境界地にある（Валиханов 1985a: 44）。

以上の6集団，すなわちソルトゥ，ブグゥ，サルバグシュ，サヤク，チェリクチ，チョンバグシュに加えて，バグシュ багыш, モノルドル монолдор, アドゲネ адгене, トガイ тогай, バズィス базис の5氏族が，右翼の集団として挙げられているが，詳細なデータはない。この5集団は左翼の諸族とともにシル河上流域やコーカン［コーカンド］・ハン国の範囲内に遊牧地をもっており，風俗や言語において彼らに［コーカンド・ハン国の住民に］似ているという（Валиханов 1985a: 44）。

またワリハーノフは別の箇所で，オン部（отдел）［すなわち右翼］のキルギズはサルバグシュ，ブグゥ，ソルトィ солты, サヤク，バグシュ，チェリク черик, ジャディゲル джадигер, モノルダル монолдар という主要な氏族に分かれる，と記述している（Валиханов 1985a: 82）。

一方，ラドロフは右（Ong）［右翼］の部分は6部族（Stamm）に分かれるとし，ブグゥ Bugu, サル・バグシュ Sary Bagysch, ソルトゥ Soltu, エディゲナ Edigäna, チョン・バグシュ Tschong Bagysch, チェリク Tscherik という6部族名，その遊牧地域，さらに各部族に属する下位集団の名をあげている。また，ブグゥとサル・バグシュの一部については，1862年にロシア国籍に入った者の統計資料（ロシアの役人が作成）を引用している（Radloff 1968: I-230-234; Радлов 1989: 106-109）。ラドロフは，1862年にカルカラ河でブグゥ族と出会い，1864年にソルトゥを訪ね，ロシア征服から5年後の1869年にはサル・バグシュとソルトゥを訪ねている（Radloff 1968: I-526, 527, 533; Радлов 1989: 348, 353）。ラドロフの情報は主としてそれらの旅行において収集されたものであろう。彼が1864年にソルトゥを訪ねた時，役人たちは彼に，ロシア人による最終的な征服ののちキルギズはユルタ［天幕］の設営を変え，カザフと全く同様にアウルに分かれはじめた，と語ったという（Radloff 1968: I-527-528; Радлов 1989: 348）。これがキルギズ遊牧民の集団組織に何らかの影響を与えたのであれば，ワリハーノフの伝える情報は，変化前のものとして貴重である。

図 6　地図（Валиханов 1985b: 256 と 257 の間の地図に主として依拠する）

次に左翼の構成を見る。ワリハーノフは4つの主要な氏族（род）としてサルゥ сару, クトチェ кутче, ムンドゥズ мундуз, キタイ кытай を挙げている（Валиханов 1985a: 44）。さらに，別の箇所では，ソル部［左翼］のキルギズは多数の氏族に分かれ，そのなかで有名で主要な氏族はサルゥ，クシュチ кушчи, モンドゥズ мондуз, キタイ，キプチャク кипчак, アドギネ адгине, ナイマン найман である，と述べている（Валиханов 1985a: 82）。また，別の箇所では，バズィス базис, アディギネ адигине, ジェディゲル джедигер, バグシュ бағыш, トゥンガタル тунгатар, クシュチュ кушчу, サルゥ，キタイがソル・キルギズとして挙げられている（Валиханов 1985a: 89）。

このような左翼に属する諸氏族との統属関係は不明であるが，コーカン［コーカンド・ハン国］の範囲内で遊牧しているソル部の15の分派（поколение）の名称がそれぞれの活動地域とともに列挙されている（Валиханов 1985a: 44–45）。その名称と活動地域は次の通りである。

1）ボレ боре——ウシュ Уш［オシュ］
2）ムンドゥズ——アズレト・アユブ Азрет-Аюб（コーカン［コーカンド］の東方）
3）ケセク кесек——アウシラト Аушират とマルゲラン Маргелан［マルギラン］
4）ビョルゥ бöру——ナウカト Наукат とウチュクルト Учкурт（マルゲランの東方）
5）クィドィルチ кыдырчи
6）ティイト тиит——ウチュクルトの北方
7）トゥヤリャス туяляс——シャフルハン Шахрхан［シャフリハン］（アンジャン Анджан［アンディジャン］とマルゲランの間）
8）ブスタン бустан——同上
9）アルダイ ардай——リョフシャト Лёхшат（タフト・スレイマン Тахт-Сулейман とアンジャンの間）
10）ムニャク муняк——タシュ・アタ Таш-Ата
11）バグシュ——ブラクバシ Булакбаши（タシュ・アタの上流でシャフルハンに流入する河）
12）チョンバグシュ——ハンアルィク Ханарык
13）カングルィ канглы——アシャケ Ашяке［編者注によると，より正確にはアッ

サケ Ассаке］（マルゲランとアンジャンの間）

14）タルィチ Тарычи

15）ブイダイチュ буйдайч——スザク Сузак（ジャラール・アーバード Джалал-Абад の南西）

この中にバグシュやチョンバグシュの名が見えるが，右翼に属する氏族として挙げられた同名の集団との関係がどうなるのか，ワリハーノフは何も記していない。ただ，これら15の分派はコーカンの住民との不断の交際によりウズベクの影響に屈して，民族的特質を失い，習慣においても言語においても完全にジャガイ джагай［編者註によると，多分ジャガタイ］のテュルクたちに似ているという（Валиханов 1985a: 45）。ジャガタイのテュルクとはチャガタイ人の意味で，西トルキスタンの定住民を指しているのであろう。

ラドロフは左翼について，右翼よりもはるかに少数であり，タラス河で遊牧しており以下の諸族より成るという。すなわち，サルゥ Saru, ベシュ・ベレン Besch Berän, ムンドゥス Mundus, テョンテョリュプ Töngtörüp, クチュ Kutschu, キュルキュレン Kürküren, イェティゲン Jetigän (Radloff 1968: I–231; Радлов 1989: 107)。

ワリハーノフはキルギズの活動している領域を概観しながら次のように記している。

大多数の氏族の遊牧地の中心はアンジャン［アンディジャン］付近と，そこから北はチューまで，西はチルチクまで，東は中国のアクスゥ，ウチュ［・トゥルファン］，カシュガルの町まで，南はバダフシャンまで広がる山地にある。キルギズのオン部［右翼］の大部分とソル部［左翼］の全てと「ウトゥズ・ウウル утуз уул」[16] の名で知られる諸氏族がそこで遊牧している。小ブハーリア［すなわち東トルキスタン］の中でカシュガル，アクスゥ，トゥルファン［すなわちウチュ・トゥルファン］付近でチョン・バグシュ（アクスゥ），チェリク（ウシュ［すなわちウチュ・トゥルファン］），ナイマン（カシュガル）が遊牧している。サルコル（パミール）ではナイマンとキプチャクという氏族が遊牧している。タラスとチュー沿いに遊牧するサヤクとソルトゥはしばらく前からコーカンド人に［文化的に］非常に近くなった（Валиханов 1985a: 8–9）。

さらにイッシク・クル湖周囲の地理的概観のところでも，そこで活動するキルギズの諸集団について次のような記事を残している。イッシク・クルの地でブグゥ氏族，サルバグシュの一部，サヤクが冬営する。ソルトィはチューに，バグシュは［ウチュ

・] トゥルファンとカシュガルの間に，チェリクとサヤクはアトバシに遊牧している。ソル部の全ては，南はバダフシャンまで広がっていて，ナリン河とチルチク河の流域と山地を占めている。ブグゥ氏族は夏の遊牧地として，カルカラ Каркара の山地までや，中国のイリの山上，テケス河まで入る（Валиханов 1985a: 10)。

ワリハーノフはさらに「キルギズ諸族の氏族下位区分」(Валиханов 1985a: 82–89) においてイッシク・クル湖，チュー，タラス，ナリン諸河川で遊牧している諸氏族に属する集団の小区分を列挙し，ユルタ（天幕）の数，現在の支配者，遊牧地などの細かいデータを記録しているが，ここでは取り上げない。

3）口頭伝承

ワリハーノフはキルギズの間で伝えられている口頭伝承を記録している。右翼と左翼の由来，キルギズの出自，イッシク・クル湖出現という三つの伝承を彼の記録により整理しておこう。

a）右翼と左翼についての伝承

最初の族長キルギズバイ Киргизбай にはアク・ウウル Ак-уул（白い男児）というただ一人の息子があった。ある伝承によると，アク・ウウルには二人の息子——アブル Абл（Абыл とも書く。アベル Авел［アダムとイヴの子］）とカビル Кабил（カイン Каин［アダムとイヴの子で，アベルの兄］）——がいた。別の伝承によれば，アブルとカビルはアク・ウウルから直接ではなく，ある親等をへて出自した。アブルの子孫は右翼をなし，カブルの子孫は左翼をなしている。

アブルの孫タガイ Тагай は年長の妻から三人の息子，すなわちボゴアルスタン Богоарстан, コイラン Койлан, キルジル Килджир を持ち，二番目の妻・他国者から一人の息子カラチョラ Карачора を持った。一番目の息子からソルトィが由来し，二番目はジャディゲルの族長（родоначальник）であった。三番目の息子（キルジル）の二人の息子——ウラズバクトィ Уразбакты とダウレス Даулес——からブグゥとサルバグシュが由来し，最後のカラチョラからサヤクが由来した。

伝承は，タガイによって養子にされた二人の族長——その一人は彼の甥で，モノルダル族（колено）の父となり，もう一人はチェリクチ分派（поколение）の族長である奴僕——もタガイの家族としている（Валиханов 1985a: 40–41)。

この伝承の中で注目されるのは，右翼の祖とされているアブルの孫タガイである。タガイの子孫および養子から，ソルトィ，ジャディゲル，ブグゥ，サルバグシュ，サ

ヤク，モノルダル，チェリクチという集団が出自したというこの伝承は右翼のグループ分けを示していると考えられる。それらの集団は，前節で見たように右翼の集団として挙げられている。タガイも右翼の集団の一つとして挙げられているが，この伝承からすれば，それらの集団の上位グループ名と考えることができよう。

（НСАК 1963: 175）によると，19世紀のキルギズにおける氏族部族的構造は，それ以前の時代と同様に複雑であったが，右翼はタガイ，アディギネ，ムングシュの3分支（ветвь）に分かれ，タガイ分支に13部族（племя）が属している。その13部族の中に，上の伝承のソルトィ（ソルト солто），ジャディゲル（ジェディゲル жедигер），ブグゥ，サルバグシュ，サヤク，モノルダル（モンゴルドル моңолдор），チェリクチ（チェリク черик）が含まれている。

b）キルギズの出自についての伝承

キルギズは異口同音に赤い犬を自らの先祖，父と考えている。赤い犬（クズル・タイガン qïzïl tayġan, кизил тайган），まさに赤いボルゾイ犬[17]を自分の祖先と考えているという（Валиханов 1985a: 46, 54, 65）。この奇妙にみえる，祖先についての彼らの考えは次のような言い伝えに基づいている。

ワリハーノフはまず，本来の修正されていない伝承を記している。すなわち，あるハンの娘は40人の乙女の召し使いを伴って遠くへ散策する習慣があった。いつもの散策から帰ってみると，アウル［遊牧キャンプ］のすべては敵に壊されていた。彼女らはアウルの場所に一つの生きているもの――赤い犬を発見した。王女，40人の女召し使いはただ一つの男性の誘惑――赤い犬を仲間にもっていて，母となった。40人の乙女の子孫，クルク・クズ кырк кыз[18]はその婦人の数によりキルギズの民と呼ばれるようになった（Валиханов 1985a: 46）。

ワリハーノフは続けて，この伝承についての注釈を記している。すなわち，ある者たちはつぎのように言っている。40人の乙女の中に，女の服装をした，王女のお気に入りの若い人がいた。彼は最も親しい親衛兵であり，王の踵や他の興奮しやすいところをマッサージする人（？ щекотатель）の任務を遂行した，と（Валиханов 1985a: 46）。

さらに，つい最近に生まれた別の込み入った説明として次のような言い伝えが記録されている。すなわち，昔々マンスール Мансур という名のデルヴィーシュ・ディーヴァーナ дервиш дивана がいて，ハラール Халаль という名の純潔の妹［または姉］がいた。神の偉大さに魅せられたきょうだいは独居，斎戒，祈禱に日々を過ごした。

妹［または姉］はより神聖さをそなえていて，楽園の甘美な飲み物のことのために，弱い身体と心を強化しつつ，天使との，魂を救済する対話に夜を過ごした。隣人たちは，熱狂したハラールの夜の失踪に気づき，たぶらかされた乙女が同様な行状をした時にいつもそうであるように，けしからぬ結論を出した。

噂がじきに兄［または弟］の耳に入った。彼は噂を信じなかったけれども，「細心さは妨げにならない」というコーランの言葉に従って妹［または姉］のあとをつけ，楽園の甘美な飲み物を飲んだ天上の住人たちの集まりの中に彼女を見付けた。天使たちは彼に楽園の甘美な飲み物の杯を進めた。ハラールは兄［または弟］の極めて熱狂しやすい性格を知っていて反対した。しかし兄は飲み，妹［または姉］が予感していたようになった。

マンスールは人々を忘れ，自分を忘れ，放浪者の長杖をとり，頭に白鳥の外皮を被って（托鉢僧（ファキール факир）たちの不可欠な特徴），アッラーの名を口にして眼の向いた所に赴いた。マンスールは多くの土地や町を通り過ぎ，（コーカン［コーカンド］）のアンジャン Анджан［アンディジャン］の町に現れた時，多くの年月が経っていた。町には疫病と飢餓があった。町の住民たちはマンスールを見て，妖術者として，自分たちの土地の全ての災難の原因となった人として捉え殺した。

マンスールは死に際に，ただ一つの遺言をした。友人の汚い奴タシュチャ Ташча に向かって言った。「人は世のため子孫のために何かをしなければならない。それは人の責務である。私は生涯で何もしなかった。私の身体を持っていき焼いて湖に投げ込め。そこでかのタクディール тагдыр（運命）が実現されよう。」タシュチャは実行した。湖は波立ち，泡立ち始めた....すべて静まった。ただ波が打ち上げた，白い天幕の形の泡が残った。

ハンの娘が40人の乙女・女官を伴にして岸を散策していた。王女は白い泡を発見し，好奇心を起こして，それを指にとって味をみるために口に入れた。40人の乙女も同じことをした。

しかし数ヶ月後に彼女らが特別な理由なしに妊娠した時，彼女らの，そして彼女らの父親の驚きを想像してごらんなさい。父親たちは娘たちをひどく疑い，非難すべき行状の姦通者（？ прелюбодеиц）としてチュー河の向こう，北方のステップに追い出した。40人の乙女は王女を自分たちの不幸の張本人と見なして非難し始め，王女は一頭の弱々しい雌馬に乗って女友達から北へ逃げなければならないことになった。

赤い犬がどこから彼女のあとをついて来たのかは分からない。3人の兄弟（キルギズ［ここではカザフを指す］の三つのオルダの祖先）がステップでこの美女を見つけ，

その一人が彼女と結婚した。父が死んだ時，子供たちは遺産，家畜を分割することになった。40人のキルギズの乙女に因んでキルギズ Киргиз と呼ばれる，海の泡からの賜物［たる子］は，年長としてより多くの物を持つことを望んだ。人間から生まれた他の子供たちは，その厚かましさに怒って，父親は誰かと尋ねた。キルギズバイ Киргизбай は返答できなかった。兄弟たちは，彼［キルギズバイ］の母が自分たちの父と結婚生活をする前に一匹の犬とのみ隣り合って［暮らして］いたことをほのめかし，彼に父として赤い犬を紹介した。兄弟たちは要求の不公平さを証明して，千頭のうち47頭の馬を彼に与えた。

キルギズバイはアンジャンに逃げたが，年長たることの自負――彼はそれを，馬勒とクミス［馬乳酒］のかもし杵を母のユルタ［天幕］から盗むことにより証明した――を捨てなかった。ステップに住む人々の考えでは，馬勒とかもし杵は年長たることの象徴である。

このキルギズからキルギズの民が生じた。残っていた40人の乙女から，現在アンジャンの向こうコーカンの方に住むオトゥズ・ウウル・イチュキリク отуз-уул ичклик の民が生じた（Валиханов 1985a: 46–48）。

この込み入った伝承の中に，我々は容易にイスラム神秘主義（スーフィズム）の要素を見いだすことができる。「デルヴィーシュ・ディーヴァーナ」とは，「托鉢僧」という意味に解される。またデルヴィーシュ・ディーヴァーナたるマンスールは，「人々を忘れ，自分を忘れ，放浪者の長杖をとり，頭に白鳥の外皮を被って，アッラーの名を口にして眼の向いた所に赴いた」という。白鳥の外皮を被ることが托鉢僧（ファキール）たちの不可欠な特徴であるというワリハーノフの注記の正否は判断し難いが，長杖を手に放浪するその姿は，土俗的なスーフィー（神秘家）を想起させるのである。

伝承の最後にまとめられている所から判断すれば，この伝承の語り手のキルギズにとって，その始祖はキルギズバイであり，40人の乙女は別の民の始祖であろう。その別の民とみなされるオトゥズ・ウウル・イチュキリクとは何であろうか。（НСАК 1963: 175）によると，19世紀のキルギズの氏族部族的構造おいて，諸部族は全体で三つのグループを形成した。すなわち，右翼と左翼とイチュキリク ичкилик という三グループであり，右翼と左翼はオトゥズ・ウウル，つまり30人の息子と呼ばれた。それから考えれば，伝承のオトゥズ・ウウル・イチュキリクはキルギズ族全体を指すものでなければならない。そうであるならば，キルギズバイを始祖とするのは，キルギズの中のある集団のみなのであろうか。いずれにしても，この伝承にはいくつかのモチーフが絡み合っているように思われる。

c) イッシク・クル湖出現についての伝説

最後に，ワリハーノフが調査したキルギズの住地に密接な関わりを持つイッシク・クル湖について民衆に伝わる次のような話を見てみよう。

現在イッシク・クルである所にかつて，豊かな町まちのある広々とした平原があった。その異教徒のハンの一人は高齢になっても子がなかった。彼はロバの姿でも良いから息子を下さいと神に祈った。その祈りは聞きとどけられた。彼の妻の一人は，彼女に非常な注意を払うロバに出会った。スルターンの妃も運命の測り知れぬ意思により，長い耳をしたやさ男に不思議な優しさを感じた。密通が始まり，男の子がその結果であった。年老いたハンは，ついにキョク・タンル Кок Танры［編者注によると，蒼天――神］が後継者をつかわしたと，歓喜し，急いでその子を見た。ハンは赤ん坊のラッパ型の長い顎や長いロバの耳にも驚かなかった。

赤ん坊は成長し，父の死後ジャンベク Джанбек の名でハンとなった。君主たる彼は賢明で公正であったが，自分の長い耳を隠したいという欲求のために，意に反して予防手段を取らざるを得なくなった。帝王の頭をきれいにした床屋はみな，自分の家に戻らなかった。床屋たちの不可解な失踪は民衆を恐怖におとしいれ，誰もこの職業に就くのを望まなかった。ハンは犠牲者を選ぶために，くじを引かねばならなかった。

ある老人の一人息子にくじが当たるまでに，多くの年月が過ぎ，多くの民が非業の死を遂げた。運命づけられた若者は特別な技術で剃り始め，一瞬のうちに仕事を終えた。ジャンベクは若者の剃り方がとても気に入った。ハンはこの血まみれの遊びを終わりにすることを固く決意し，自分の秘密を若い理髪師に伝え，自分の大臣にした。

一つの茶わんからクミズ［馬乳酒］を飲み，一つの皿からピラフを食べるほど，ハンは大臣と仲が良かった。しかし大臣は高慢となり，自らを滅ぼした。ハンは鷹狩りが好きであり，大臣は同行し，二人とも鷹をもっていた。大臣の鷹はハンの鷹を追い抜いて白鳥を捕らえた。喜びのあまり高慢な気持ちにとらわれた大臣は，我を失って叫んだ。「私の鷹は，ロバの頭のハン，ジャンベクの鷹よりも良い」。居合わせた民衆は，何故ジャンベクが床屋たちの命を奪い，迫害するようになったのかを即座に理解した。ジャンベクは赤面し，大臣を殺せと命令できただけで，自分の宮殿に逃げだした。その間に大臣は我にかえって自分の状況を知り，山地へ逃げた。この時からジャンベクはロバの耳とあだ名された。

大臣は長い間，山地を放浪して夜にだけ町を訪ねていた。ある夜，町のなかにある，金の蓋のついた王の井戸のもとに来た。彼はその井戸から水を飲んだ昔のことを思い出し，自分の大臣職を回想し，町の住民を恩寵に値しない不信心者として捉えるよう，

声高に神に祈りだした。アッラーは堕落と不信仰の故に，この町に対して立腹した。クプ・オリャイ・クプ куп оряй куп!（かくあれ！）とアッラーは言った。井戸から水が巨大な柱で噴き出し，一夜で町に湖——イッシク・クル湖ができた（Валиханов 1985a: 26–27）。

この伝説の背景には，沿岸の町まちを破壊した地震がある。強い暴風のとき種々の日用家財道具が湖から打ち上げられる。それはこの伝説の正しさを民衆によりよく確信させているという（Валиханов 1985a: 27）。

ロバの頭のハン，ジャンベクはキルギズの祖先ではなく，カザフ民族のハン家の始祖で15世紀半ばの人，ジャーニー・ベクに当たるのであろうか。また，その大臣というは，キルギズ民族の人なのであろうか。ギリシア神話に見えるミダース王の一節（呉 1969: 上–315–316）に似た，この「王様の耳はロバの耳」の伝承には，キルギズ族以外の民族にも関わる問題が含まれているように思われる[19]。

4）農業

ワリハーノフのキルギズについての調査報告を読んでいて意外に思われる事は，キルギズがかなり農業をおこなっているという事実である。我々はキルギズを山岳地の遊牧民としてのみ想定しがちであるが，農業の側面にも注意を向ける必要があろう[20]。ワリハーノフの報告を整理しておこう。

イッシク・クル湖はディコカメン・オルダ［すなわち，キルギズのこと］の冬営地にすぎない。彼らはそこに穀物を播種し，その収穫まで，家畜が蚊やうまあぶに煩わない涼しい谷間に去る。ジルガランからアクスゥ Аксу とクズルスゥ Кзылсу までブグゥが暮らし，サルバグシュが北を占める。ジルガラン河の流域は飼料の面で最良の場所とみなされており，家畜群の冬営地として大切にされている（Валиханов 1985a: 10）。

ディコカメンヌイ・キルギズィ［すなわち，キルギズ］は［シルダリア河の］諸水源やアトバシにおいて豊かな耕地を持っている（Валиханов 1985a: 20）。

［イッシク・クル湖沿岸では］穀物は40倍できるが，四か月で十分である［カザフの］大オルダよりも，遙かに遅く成熟する（Валиханов 1985a: 24）。

テルスケイ沿いの［イッシク・クル］湖沿岸は［農業に］最良の場所とみなされている。サルバグシュは北斜面，クルメトィ Курметы からケルセンギル Керсенгир まで耕地をもっていた（Валиханов 1985a: 25）。

キルギスは穀粒を蒔く，そして遊牧民がこの生産物を必要としているので，大量に

である。小麦の穀粒［1］カプ кап［編者注によると，袋］は10カプの収穫をもたらす。ブグゥ氏族の全キルギズは毎年約1万5千カプの種子を蒔く。彼らは主として小麦，大麦，黍の種を蒔く。黍から酒が造られ，酒からはウオッカが造られる。アクスゥ河沿いにバルスカウン Барскаун までとトィチュカン Тычкан 河までの南の谷間は耕地よって占められている。そこの全ての小川には水車が備えられている。ブグゥのマナプ，ブランバイ Буранбай は，ブドウ・杏・林檎・桃・梨その他を植えた果樹園を設け，菜園をも設けたが，それらは全てサルバグシュの内訌的掠奪により，駄目になった。ここでの畑地の灌水方法は中国西部やコーカンと同じく，灌漑である（Валиханов 1985a: 33）。

穀物が40倍の収穫をもたらすというのは信じ難く，その種類を知りたいが，これらの情報はキルギズの生活様式を考える上で貴重な材料となるであろう。灌漑の方法や設備がどのようなもので，どれくらい普及していたかなど，今後の追求すべき課題である。いずれにしても，キルギズの遊牧生活と農耕との関係の再吟味を迫る情報であろう。

ラドロフも簡単にキルギズの農業について言及している。すなわち，農業はカザフにおけるよりも広く黒キルギズに普及している。彼らはより入念に土地を耕作し，平均して約10–15倍の穀粒を収穫する。畑は人工的に灌漑されねばならない。ふつう黒キルギズの灌漑作業はカザフよりも入念におこなわれる。ブグゥは主としてテルスケイ，キュンゲイ Küngäi，トゥイカル Tuikal の湖の岸辺に畑を持ち，サル・バグシュはキュルメト Kürmet 河とキシンギル Kissinggir 河の間に畑を持つ。黒キルギズは小麦，大麦，幾種類かの黍の種を蒔く。馬の飼料として大麦と特別な種類の黍を用いる。黒キルギズは黍からビールのようなもの（ブズ busu/ブザ буза）を用意し，それからブランデーを蒸留して冬に飲む（Radloff 1968: I–528; Радлов 1989: 349）。

おわりに

ワリハーノフによるキルギズについての博物学的な調査研究を，筆者の興味に従って整理してきたが，いまだ不分明な箇所は多く残っている。例えば，その記録に出てくるこまかな地名の中には，筆者が利用し得た地図上に同定できないものも多い。また，彼の報告の全てが正しいかどうかも，同時代の現地語史料や清朝の記録などの資料により検証していかねばならない。しかし，本稿で紹介したように，彼の多方面にわたる記述が，我々のキルギズ人理解に多くの寄与をなすことは疑いないであろう。

そして，未だ正当に評価されていない中央アジアにおけるキルギズ民族の歴史的意義・役割の検討に種々の材料を提供しているのである。

彼のキルギズ研究がイッシク・クル湖を中心とする地域をフィールドとしておこなわれたことも，その価値を高めていると思われる。古来，東西南北の交通路が交差したこの地域は，東西トルキスタンの接点として，また遊牧地域と農耕地域の交錯地点として，中央アジア史上に重要な意義を有していたのである。

近代ヨーロッパ的な学問を学んだカザフ人ワリハーノフは，前近代中央アジアのキルギズ人の生活世界を事細かに記録して後世に伝えた。そのような調査研究をおこなった彼の姿の中に，中央アジアの草原における新たなる時代の到来が予感されもする。

注

1) この全5巻の『著作集』は，ワリハーノフの生誕150周年を記念して刊行されたものである。すでに1961年から1972年にかけて，テーマ別編集の全5巻の『著作集』が出版されている（Валиханов 1961; 1962; 1964; 1968; 1972）が，1984–85年の新版は基本的に1961–72年出版の『著作集』に基づき，著作年代順に編集しなおされている。

2) ワリハーノフ『著作集』の編集責任者マルグラン A. X. Маргулан 執筆のワリハーノフの伝記が，その『著作集』巻1（Валиханов 1984: 9–77）に載せられているので，主としてそれに依拠する。わが国でも，田中克彦（1961a; 1961b），加藤九祚（1980: 74–76; ジューコフ-加藤 1963: 186–215），森川晴（1988; 1989）による紹介や研究があるので，参照されたい。なお伝記として（Togan 1981: 543–551; Стрелкова 1983; Сулейменов-Моисеев 1985）もある。

3) カザフ語で「七つの国（журт）の言葉を知る」という意味に解される。国と翻訳した журт の語義には，1）people, nation; 2）community, public; 3）camp, camping site がある（Shnitnikov 1966: 112）。七つの журт が指し示す集団もしくは地域の具体的な名称は明かでないし，このカザフ語の言い回しが当時の実状を反映しているのかどうか，という疑念は残るけれども，カザフ王侯の言語教育に対する積極的態度が窺われる。

4) オムスクにおけるセミョーノフ・チャンシャンスキーとワリハーノフの出会いの模様や，彼がガスフォルト総督にワリハーノフのカシュガル旅行を勧めていたことが，チャンシャンスキーの伝記（Алдан-Семенов 1965: 130–134; アルダン・セミョノフ 1972: 170–175）に記述されている。また，セミョーノフ・チャンシャンスキーとアジア局長コワレフスキーによるワリハーノフのカシュガル遠征の決定についても，同書（Алдан-Семенов 1965: 171; アルダン・セミョノフ 1972: 224–225）に述べられている。

5) カシュガルでの滞在中や往復路での見聞については，（澤田 1993）を参照されたい。

6) このテゼクは1857年5月・6月にセミョーノフ・チャンシャンスキーのイッシク・クル湖への調査遠征に同行している（Алдан-Семенов 1965: 136, 139, 143–144; アルダン・セミョノフ 1972: 179, 183, 188–189）。なお，ワリハーノフ『著作集』巻1（Валиханов 1984: 355）

に画家コシャロフ П. Кошаров によるテゼクの肖像画が載せられており，また『著作集』巻4 (Валиханов 1985c: 112) にワリハーノフの手による肖像画も載せられている。

7) 1857年6月7日，セミョーノフ・チャンシャンスキーはマーラヤ・カルカラの岸辺の遊牧地で，このブランバイ Бурамбай に会っている。当時ブグゥ族 богинецы はサルバグシュ族と抗争していたが，ブランバイはセミョーノフにロシアへの臣従の手助けを依頼したという。またブランバイはイッシク・クル湖の東半分とハン・テングリに至るまでの天山の北山麓を治めていたという（Алдан-Семенов 1965: 143–144, 153; アルダン・セミョノフ 1972: 188–189, 201)。なお，ワリハーノフの筆によるブランバイの肖像画がワリハーノフ『著作集』巻1 (Валиханов 1984: 320 と321の間）に，チャンシャンスキーに同行した画家コシャロフによる同人の肖像画がチャンシャンスキーの伝記（Алдан-Семенов 1965: 160 と161の間; アルダン・セミョノフ 1972: 189）に載せられている。

8) カザフ語の辞書によると (Shnitnikov 1966: 18, 203)，ТОРЫ は「栗毛」，АЙГЫР は「種馬」であり，ワリハーノフの説明と一致する。ラドロフの『トルコ方言辞典稿』でも，この二つの単語は採録されている（Radloff 1960: I–16, III–1182, 1452)。

9) セミョーノフ・チャンシャンスキーも同様の伝説を記しているが，サンタシュを「千の石」と解している（セミョーノフ・チャンシャンスキイ 1958: 116; Алдан-Семенов 1965: 144; アルダン・セミョノフ 1972: 189–190)。サンの語義（「計算，数」(Radloff 1960: IV–296; Shnitnikov 1966: 167; Юдахин 1965: 631; Yudahin & Taymas 1988: 635–636)）と伝承内容からすれば，ワリハーノフが記述するように「計算の石」のほうがふさわしい。なお（ジューコフ–加藤 1963: 56–57）も同様の伝説を記し，サンタシュを「数えられた石」という意味に正しく解釈している。なお，サンタシュ峠のクルガンの写真が（加藤 1991: 66）に載せられている。

10) カルムィク（カルマク）・ジュンガルとは，モンゴル系のオイラト族のことを指している。オイラト族の首領バートル・ホンタイジが17世紀前半に，カザフ人やキルギズ人など西方の隣人を攻撃し，カザフのハン，イシムとも戦ったことは，史実である（Barthold 1956: 160; 佐口 1966: 109–110; 1979: 75)。しかし，イシム・ハンがサンタシュ峠付近で戦いに勝ったかどうかは不明である。

11) この『マナス』の一部分のアラブ文字キルギズ語の写本が，アジア諸民族研究所の東洋学者公文書保管所で A. X. マルグラン氏によって新たに発見され（Валиханов 1985a: 368)，その写真が『著作集』の巻2 (Валиханов 1985a: 101–147) に載せられている（但し，その写真版の112ページと114ページ，133ページと134ページ，140ページと141ページのものは，それぞれ入れ替えなければ，葉数通りにならない)。(Hatto 1977) はこの写本に基づいてキルギズ語のテキストを再現し，翻訳した (Hatto 1977: vi–vii)。

12) (Barthold 1987: 1025) によると，1758–1759年にカルムィクの帝国［ジュンガル王国］が中国人に［清朝に］滅ぼされた後に，キルギズがセミレチエ南部の旧領に戻った時，キルギズという名称はロシア人によりカザーク［すなわち，カザフ］に転移され，後者と区別するために本来のキルギズは黒キルギズ（カラ・クルグズ）と呼ばれた。(加藤 1983: 653) によると，カザフ族は1925年頃までロシア文献でキルギス・カザクまたは単にキルギスと称された。トカレフ C. A. Токарев の見解では，1730年頃から，つまりカザフ族の一部がロシア帝国の治下に入ってから，キルギス・カザクとよばれるようになり，これは一面ではロシアのいわゆるコサック（これも казак と書く）と区別するために，他面では隣接のキルギス族

とよく似ているところから，文献上でキルギス・カザクまたはキルギス・カイサクともよばれるようになったという（加藤 1983: 653）。なお，この誤った呼称「キルギス」は1925年4月に廃止された（小松 1988: 55, 注5）。

13）ディコカメンヌエ・キルギズィは，"Wilde-Stein-Kirgisen"（Radloff 1968: I-230）「花崗岩のキルギス」（バルトリド 1939: 413; Бартольд 1977: 404），「花崗岩キルギズ」（佐口 1944: 78），"Mountaineer Kirghiz"（Winner 1958: 102），「野生の山地キルギス」（西・福島 1990: 67, 訳注 1）と翻訳されている。

14）清朝の漢籍では「布魯特」と音写されている。元来オイラトが用いていた呼称が清朝文献に採用されたという（佐口 1944: 77）。

15）キルギズ語の辞書（Юдахин 1965: 806; Yudahin & Taymas 1988: 785）によると，ураан（uraan）は「関の声」「戦闘に召集する叫び」という意味である。

16）ウトゥズ（正しくはオトゥズ отуз）は「30」，ウウルは「息子」の意で（Юдахин 1965: 584, 810; Yudahin & Taymas 1988: 603, 788），「30人の息子」という意味になる。

17）（Radloff 1960: III-768）においても，タイガンは「ボルゾイ犬」または「グレーハウンド犬」の意味になっている。

18）クルクは「40」，クズは「娘」の意である（Юдахин 1965: 495, 476; Yudahin & Taymas 1988: 459, 469）。

19）（ジューコフ-加藤 1963: 164-165）に類似の伝説が紹介されている。そこでは王の名はジャニベクという。楊海英氏は国立民族学博物館共同研究会「遊牧の歴史と現在」（1991年3月11日）での「チャガン・ノール伝説に関する一考察」と題する研究発表において，内モンゴルのオルドスでモスタールトが採集したロバの耳をしたハーンの話（モスタールト 1966: 144-153）に言及した。

20）（佐口 1963: 359-360）にはキルギズの農耕についての清朝史料が引用されている。

文　　献

Алдан-Семенов, Андрей Игнатьевич

1965 *Семенов-Тян-Шанский*. Москва: Издательство Молодая гвардия.

アルダン・セミョノフ

1972『はるかなる天山』田村俊介訳，新時代社。（Алдан-Семенов 1965 の日本語訳。）

Barthold, V. V.

1956 *Four Studies on the History of Central Asia*, vol. I. Translated from the Russian by V. and T. Minorsky. Leiden: E. J. Brill.

1987 Kirgiz. *E. J. Brill's First Encyclopaedia of Islam 1913-1936*, vol. IV, pp. 1025-1026. Leiden: E. J. Brill.

Бартольд, В. В.

1963 Киргизы. Исторический очерк. *Сочинения*, том II, часть 1, стр. 471-543. Москва: Издательство Восточной литературы.

1977 История изучения Востока в Европе и России. *Сочинения*, том IX, стр. 197-482. Москва: Издательство《Наука》Главная редакция восточной литературы.

バルトリド，ウエ

1939『欧州殊に露西亜に於ける東洋研究史』外務省調査部訳，生活社。

Hatto, Arthur T.

1977 *The Memorial Feast for Kökötöy-khan* (*Kökötöydün aši*). *A Kirghiz Epic Poem*. Oxford: Oxford University Press.

ИКазССР III
1979 *История Казахской ССР.* В пяти томах, Том 3. Алма-Ата: Издательство《Наука》Казахской ССР.
加藤九祚
1980 「ロシアの東トルキスタン探検とオルデンブルグの仏教遺跡調査」樋口隆康編『続シルクロードと仏教文化』, 71–100, 東洋哲学研究所。
1983 「カザフ族の遊牧生活」『国立民族学博物館研究報告』8(3), 653–696。
1991 『続・ユーラシア文明の旅』武蔵野市：加藤九祚。
川上　晴
森川　晴を見よ。
小松久男
1988 「『トルキスタンにおけるイスラム』——総督ドゥホフスキー大将のニコライ二世宛上奏文——」『東海大学紀要文学部』50, 35–65。
1996 『革命の中央アジア——あるジャディードの肖像』（中東イスラム世界7）東京大学出版会。
呉　茂一
1969 『ギリシア神話』上・下，新潮社。
森川（旧姓：川上）晴
1980 「アブライの勢力拡大——十八世紀カザフスタン史に関する一考察——」『待兼山論叢』（史学編）14, 27–49。
1988 「チョカン・ワリハーノフについて」『大阪薫英女子短期大学研究報告』23, 45–55。
1989 「カザフ知識人の苦悩」『大阪薫英女子短期大学研究報告』24, 59–67。
モスタールト，A.
1966 『オルドス口碑集——モンゴルの民間伝承』磯野富士子訳，平凡社。
西徳二郎・福島安正
1990 『シルクロード紀行 I ——『中亜細亜紀事』『波斯紀行』——』（海外渡航記叢書3）金子民雄訳，雄松堂出版。
НСАК
1963 *Народы Средней Азии и Казахстана*, том II. Под редакцией С. П. Толстова, Т. А. Жданко, С. М. Абрамзона, Н. А. Кислякова. Москва: Издательство академии наук СССР.
Radloff, Wilhelm
1960 *Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte*, I–IV. 's-Gravenhage: Mouton & Co (reprint of St.Peterburg 1893–1911).
1968 *Aus Sibirien. Lose Blätter aus meinem Tagebuche*, I–II. Oosterhout N. B., Niederlande: Anthropological Publications (Unveränderter photomechanischer Nachdruck der Zweite Ausgabe, Leipzig 1893).
Радлов, Василий Васильевич
1989 *Из Сибири. Страницы дневника.* Перевод с немецкого К. О. Цивиной и Б. Е. Чистовой. Москва: Наука. Главная редакция восточной литературы.
佐口　透
1944 「キルギズ民族学序説——（一）民族史篇——」『民族学研究』2(1), 37–82。
1963 『18–19世紀　東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館。
1966 『ロシアとアジア草原』吉川弘文館。
1979 「カザーフ・ハン国の史的概観」『月刊シルクロード』5(2), 71–76。
澤田　稔
1993 「セミレチエからカシュガルへ——ワリハーノフの調査紀行——」『帝塚山学院短期大学研究年報』41, 216–234。
セミョーノフ・チャンシャンスキイ，ペ．ペ．
1958 『天山紀行』樹下　節訳，ベースボール・マガジン社。
Shnitnikov, Boris N.
1966 *Kazakh-English Dictionary*, with a preface by Nicholas Poppe. Mouton & Co.

Стрелкова, Ирина Ивановна
1983 *Валиханов.* Москва: Издательство《Молодая гвардия》.
Сулейменов, Р. Б., В. А. Моисеев
1985 *Чокан Валиханов——востоковед.* Алма-Ата: Издательство《Наука》Казахской ССР.
田中克彦
1961a「カザフスタンの文化活動家——チョカン・ワリハーノフのこと」『一橋研究』7, 37–42。
1961b「書評：Cokan Valixanov *Izbrannyje proizvedenija*」『民族学研究』25(4), 249–250.
Togan, A. Zeki Velidi
1981 *Bugünkü Türkili (Türkistan) ve Yakın Tarihi*, Cilt I: Batı ve Kuzey Türkistan, 2. Baskı, İstanbul.
Валиханов, Ч. Ч.
1961 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 1. Алма-Ата: Издательство академии наук Казахской ССР.
1962 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 2. Алма-Ата: Издательство академии наук Казахской ССР.
1964 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 3. Алма-Ата: Издательство академии наук Казахской ССР.
1968 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 4. Алма-Ата: Издательство《Наука》Казахской ССР.
1972 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 5. Графическое наследие, Алма-Ата: Издательство《Наука》Казахской ССР.
1984 *Собрание сочинений в пяти томах*, том 1. Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии.
1985a *Собрание сочинений в пяти томах*, том 2. Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии.
1985b *Собрание сочинений в пяти томах*, том 3. Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии.
1985c *Собрание сочинений в пяти томах*, том 4. Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии.
1985d *Собрание сочинений в пяти томах*, том 5. Алма-Ата: Главная редакция Казахской советской энциклопедии.
Winner, Thomas G.
1958 *The Oral Art and Literature of the Kazakhs of Russian Central Asia.* Durham: Duke University Press.
Юдахин, К. К.
1965 *Киргизско-Русский словарь.* Москва: Издательство《Советская энциклопедия》.
Yudahin, K. K. (Yazan) & Taymas, Abdullah (Çeviren)
1988 *Kırgız Sözlüğü*, 1–2. Ankara: Türk Dil Kurumu (reprint of 1945).
ジューコフ，ボリス
1963『湖底に消えた都——イッシク・クル湖探検記——』加藤九祚訳，角川書店。